

「夢の海」読者の感想（抜粋要旨のかたちで）

声の主は大柰の行政区画とイニシャルのみで表示

- 一気に読んだ。登場人物の描き方が良い。人間の「原罪」のようなものを扱っていると感じた。静子の生き方や選択がやむをえなかったという印象を与えていて、それが事の是非を読者に考えさせる契機にもなる。一仁、春香、信男の新しい出発が読者にとっての救いになっている。（横浜市 T・I 氏・元国語教諭）
- 男と女の世界は一筋縄では行かない世界だとはわかりますが、何かもう少し打ち解け方もあったのでは。プロットに添って計算された書き綴りになっているのは大変理解できませんが、あまりにチミツさが先にきているような面もなきにしもあらず。遊びの章があっても良かったのでは。ともかくも力作には違いありません。（小田原市 M・K 氏・画家）
- 二人の女性が相反しての女性の弱さ、優しさ、強さ、恐さ。女性の心理がよく書かれていると思う。最後にはミステリーのような驚きもあり、愛にもいろいろあるな一と思った。とても面白く一気に読ませていただいた。（横浜市 Y・T さん・主婦）
- 愛とはなんだという問題提起がうまく出来ている。どこにでもある形での男女関係、淡い好意からドロドロした男女関係まで、さまざまな愛憎を数多く描き出し、他方では固く結ばれた兄妹間の真剣で異常な愛と、哲の最期を描いて、読者に問いを投げかけている。また推理小説としても非常に面白い展開になっている。（武蔵野市 T・S 氏・財団理事長）
- さまざまな要素を含んだ小説ですね。推理小説の範疇に入らない作品ではないような気がします。これほどの「構想」、決して途中では分からない結末、それも最後には「癒し」になっていく。これは大変意地悪い小説です。読者に散々に無茶苦茶に葛藤を強いておきながら、ほっとした終末と、人間の業の深さをばさりと置いていく、これは寧ろ「爽やか」でしたね。（八王子市 M・Y 氏・同人誌編集長）
- 以前読ませていただいたものより簡素になりました、というより文章のキレが良くなったので、あとは読者の好き好きです。心が籠もりすぎるところと、何か登場人物が或る意味で自分に忠実な実直さが見えます。誰かをもう少し憎まないと感情のやり所に困るとというのが通俗的読者の感覚です。慈元と静子さんの間も、もっとドロドロでないと。（藤沢市 F・I さん・文芸誌同人）
- 「静子」には同調できかねました。自分の夫、舅、兄。その必然性。むしろ静子に振り回される周りの人達への方が感情移入しやすかった。前作の「太田道灌」とは全く違う物を書けるのは、頭の中を覗いてみたいような気がします。（横須賀市 T・W さん・主婦）
- 興味津津あつという間に詠み終わりました。ここの文章で、どうしてこのようにうまく表現できるのだろうと感心ばかり。身近の面識のある方の作品だけに、なんでこ

んな風に見えるのだろうと、圧倒されながら読み終わりました。(横浜市 K・S 氏・医師)

- 静子が、春香を佐伯の子供であることをここまで隠すのに違和感があったが、最後のドンデン返しで納得。やられたという感じ。寿司屋の朋二と編集長の恵子がいい味を出している。(箱根町 N・K 氏・個人経営)
- 毎日ドキドキしながら読んでいます。ちょっとショックを受けているのも本当です。本の表紙がとてもすてきでした。静子の生き方として、子を守るための母の愛は良くわかります。でも罪を重ねて子を守る愛は許されないと思う。近親との愛から始まった男のエゴと欲望に汚されていく静子がかわいそうです。なぜ愛をタイトルにした作品なのに女の人に冷たいのかわかりません。(伊東市 M・H さん・会社員)
- 貴方の御本を三日間通して完読し、小説の面白さが心に響いてきました。人を見殺しにするという体の冷えわたるような冷めた人間の抱える業の、耐え難いほどの重みをまざまざと知らされた様な気がします。新しい型のサスペンスを感じました。(伊東市 K・Z さん・元教諭)

■■作者馬場の独り言。この稿執筆時時点で 25 通の感想・批評を頂戴した。あとがきに書いた「登場人物の誰に共感するのかを知りたい」という思いは叶ったし、小説は読者の心の中で一人歩きをするということも確認できてとても楽しかった。最後の「黒の章」はいわゆる謎解きだが、静子の「弱さ」が初めて出てくるシーンでもある。慈元は 1 回の過ちがもたらした結果の重大性の責めを自らの強い意志で負って自死を選び、春香が本当に自分の子であるかどうか左右されていない。静子は「受精の確信」という自分にしか通用しない捉え方に終始し、兄と春香を護るという目的に変質させてその後の早蕨家での生き地獄に耐えていく。「春香は兄との間に出来た子だ」、そのことだけを心の支えにして周囲の「敵」と戦いぬかざるをえなかった静子は、果たして強いのか、弱いのか。この「弱さ」にまで言及した反応は無かったが、何人かの感想に「静子はゆるせない」というのがあって、その想いの根底にはこの捉え方があるのだろうと合点している。この作品は、静子が最後に慈元と対峙する場面を除くと、ヒロイン静子が執筆した『夢の海』がじつは今あなたが読んでいる「夢の海」の内容という 2 重構造に成っている。これは結果的にではなく最初から仕組んだのだが、ここに言及してくれた方はいなかった。少し口惜しい自分がいる。最後に、匿名で「お便り」の一部分を引かせていただいたが、全文でないと想いの全てが伝わらないので失礼な結果になったと思う。どうかご容赦くださいますよう。完読、ありがとうございました。